

5～6歳児における身体表現の特徴と感覚運動能力 ・創造的能力との関係について

金子直子・松本富子
鈴木武文

第一章 序 論

幼児の表現活動は絵画や工作に代表される造形表現、ダンスや模倣に代表される身体表現、歌や器楽に代表される音楽表現などがあり⁶⁾、これらの活動は、身体機能や運動機能を発達させ、認知や思考の力を伸ばし、社会性を育てるといわれている¹⁰⁾。

身体表現は、自己のイメージを持ち、自己の身体の動きを工夫して描いたイメージを表出する活動であり、仲間との相互交渉の中に表現技能を高めたり、美的感動を体験できる活動である。

身体表現で取り組まれる、全身を用いた動きを行う活動は、幼児の活動欲求を満足させる一方で、より進んだ身体支配を要求するので、幼児の身体支配能力を開発することができる。また、興味ある対象から動きを創り出していく活動は、豊かな感受性や柔軟な思考の力を必要とするので、これらの力を伸ばすことができる。加えて、仲間と協調して遊ぶことができたり、一人ではできないイメージを表現するために、協同的な技能が要求されるので、社会性の育成に深く関わっている。このことは、身体支配や豊かな感受性や柔軟な思考、社会性が開発されることによって、幼児がより豊かな身体表現活動を展開することができることを教えている。

したがって幼児の身体表現活動を捉えようとする場合、第一に「運動」の発達の側面、第二に「創造的行動」の発達の側面、第三に「社会的行動」の発達の側面から捉えること⁵⁾は意味のあることであろう。

幼児期の発達に関する先行研究では、三側面のそれぞれについて次のようなことがいわれている。

幼児の身体支配に関する研究では、5歳児は3・4歳児に比べ、違った動きのパターンを正確に体感し、身体意識がはっきりしていることが示されている¹¹⁾。

次いで、幼児の想像性発達に関する研究をみると、5歳児は、既有知識を利用して想像を膨らませる力や、順序立て整理した内容を創る力、を持ってると報告されている¹²⁾。このような想像力の発達は、イメージを膨らませ動きを創り出す、幼児における身体表現の支えとなっていると思われる¹³⁾。

また、幼児の社会的行動に関する研究をみると、3歳から4歳にかけて一人遊びが急激に減り、年

齢が上がるにつれて、相手が2人もしくは3人以上になることが示されている¹⁸⁾。したがって、この時期から、幼児が人間関係を広げ始め、自己中心的な視野から周りの環境へと興味を広げることがわかる。このことはすでに知られているように、幼児の表現活動の方法が自己中心的なものから、仲間との関わりへ移っていくことと関連していると想像される。

このような能力や行動の発達に支えられている幼児期の身体表現については、次のような先行研究の結果が報告されている。

若松は数年にわたる幼児の身体表現を観察し、各年齢ごとの幼児の身体表現能力を導き出している。その結果、幼児の身体表現力は、4～5歳にかけて急速に発達することを指摘し、4歳児初期の段階までは表現体になりきることが難しく、動きの工夫も単純で、個人で表現していることが多いが、4歳中頃から、複合的な動きや全身的な動きが見られ、数人で関わり合いを持ちながら表現していく様子が、見られるようになると報告している^{15) 16) 17)}。

そして、柴はジャンプを課題とし、課題と表現のつながりや動きの多様性を年齢ごとに示し、動きの工夫について検討している。その結果、5歳児では、違ったパターンのジャンプを正確に体感でき、3・4歳児に比較して、豊富であることを示し、また、一つの動きを多様化したり、二つの動きを複合する力がついてくることを報告している¹¹⁾。

また、西は「まる」と「さんかく」について言語や絵、具体物などを示した上で、幼児の身体表現を観察している。その結果、3・4才児では形をまねるだけだったのが、5才児では、具体物(ボール)によって「前転」があらわれたことから、表現対象のもつ性質が運動形態に結びつくことを報告している。これは、5歳児が表現対象のもつ性質を考慮した動きが表現できることを示している⁷⁾。

これらの結果から、幼児の身体表現を検討する場合、4～5歳児に着目することが、大変重要であることがわかる。

ところで、幼児の身体表現の全体像やその特徴は、どのような視点から捉えることができるのだろうか。これまでの研究では、一定の尺度によって幼児の身体表現を共通に捉える試みはみら

れない。すでに示した先行研究でも、年齢によって獲得される身体表現能力について、明らかにされたものの、事例的な考察にとどまるものが多く、幼児の身体表現の特徴を捉える共通の尺度を導き出すことは、意識されていない。

しかし、先行研究から身体表現を捉える視点を導き出し、具体的項目を作り、共通尺度を作成できると考える。

一方、先行研究では身体表現によって開発される諸能力、あるいは身体表現を支える諸能力について言及されているものの、幼児個人が持つ運動能力や創造的能力、社会的行動の能力が、身体表現の充実にどのような影響を与えているのかについては不明点が多い。この点についても検討が急がれる。ただし、3側面から身体表現の充実に同時に検討することは、研究方法上の困難や考察を焦点化していく上で困難が生じると考えられるので、研究に際しては、個人の身体表現活動に直接関与すると考えられる、運動能力・創造的能力に着目し、研究を行うことがよいであろうと思われる。

そこで本研究では、まず幼児の身体表現を評価する項目と基準を、先行研究より導き出し、幼児の身体表現の特徴を捉えることが出来る共通の尺度を作成することを試みることにした。その上で、5歳児を対象に身体表現を行わせ、その特徴を作成した評価項目によって明らかにするとともに、運動能力・創造的能力が幼児の身体表現にどのように関わっているのかについて考察することとした。

第二章 研究方法

1. 幼児の身体表現の評価項目の作成

対象の身体表現を評価する、評価項目の作成にあたっては、幼児の身体表現に関する文献、先行研究に検討されている、二つの視点を取り上げ、表2-1のような全6項目（ア～カ）を作成した^{4) 8)}。

第一の視点は身体表現力の発達を捉えるものである。第二の視点は、創造的能力の思考特性を捉えるものである。

5歳児の段階で獲得される、身体表現の発達傾向としては、a) 多様な動きを用いることができる、b) 変化のある動きを工夫することができる、c) 全身を使って表現できる、を挙げることができる（若松^{15) 16) 17)}、西⁷⁾）。これら3項目を第一の視点「発達を捉える項目」とし、身体表現を捉える具体的項目ア、イ、ウとした。

次に、5歳児で獲得される身体表現の工夫の仕方として、d) 多様に表現でき、表現の内容や方法に広がりがある、e) 細部にまで思考され具体的に表現できる、f) 独自の捉え方ができるを挙げることができる（柴¹¹⁾、西⁷⁾）。これらの項目は、創造的な能力の思考特性である、多様さ、広

さ、深さ、独自さに符合するものである。そこでこの3項目を第二の視点「思考特性を捉える項目」とし、具体的項目エ、オ、カとした。

2. 身体表現の収録

- ①対象 横浜市H幼稚園年長児（5～6歳）27名
- ②期間 平成8年9月中旬～10月下旬
- ③場所 H幼稚園保育室（7×11m）のフロアー
- ④課題 「好きな動物に変身」²⁾（資料1）
- ⑤収録

対象児の行った「身体表現」は、設置した4台のVTRカメラで収録した。対象児27名の3回にわたる合計81表現についての収録である。収録に際し、できるだけ日常の保育活動と同じような状況で表現ができるようにすること、さらにVTRに収



内 容	指導者の活動	子どもの活動
ウォーミングアップ 音楽が流れている間は走り回ったポーズを色々なポーズにして止まる	「好きなポーズ・食べ物・動物」	思い思いのポーズをして楽しむ
身体表現をする（3回繰り返す）	「好きな動物に変身」の合図で自由に身体表現をさせる BGM（魔法の宅急便）「みんなお家にかえっておいで」で集合させる。	好きな動物（他のものもいるが）に変身して表現を始める。子どもが表現をやめるまで続ける。（約2分）
おわり	「今日はこれおしまい」	

（所要時間約20分）

資料1 身体表現の実施の方法

表2-1 身体表現の評価項目

第一の視点	発達を捉える項目
	ア. 多様な動きを用いることができる（3種類以上）
	イ. 変化のある動きができる
第二の視点	思考特性を捉える項目
	エ. いろいろなことを表現する
	オ. 細部にまでよく思考され、具体的に表現されている
	カ. 他の子どもが思いつかない表現をする

録できることを考慮した。したがって、対象児は8名から10名のグループに分けて身体表現を行わせ、その表現がVTRに収録されたものが選ばれた。

3. 身体表現の分析方法

分析は、1に示した評価項目にしたがって行った。さらに分析は、舞踊研究者、幼稚園教諭及び幼児体育指導者の計3名の評価者によって行われた。

4. 能力別グループの編成と比較分析

1) 運動能力・創造的能力の測定

運動能力の測定には、小林フロスティック・ムーブメント・スキルテストバッテリー(MSTB)を採用した^{3) 9) 注1)}。

テストの結果を評価点換算表にて得点化し、個人得点とした。

創造的能力の測定には、S-A創造性検査P版(絵図を表現媒体とする非言語性検査)を用いた^{8) 注2)}。テストの採点は業者に依頼し、個人得点を算出した。

2) 能力別グループの編成

幼児の身体表現に運動能力・創造的能力がどのように関わっているかについて考察するために、次の①～③のような能力別のグループ編成を行った。

①運動能力別のグループによる身体表現の比較をするために、対象児の運動能力テスト(MSTB)結果を、個人得点の中央値から上位群と下位群に分けた(表2-2)。

②創造的能力別のグループによる身体表現の比較をするために、対象児の創造性検査結果を、個人得点の中央値から上位群と下位群に分けた(表2-3)。

③両能力のレベルによって分けられたグループ間で、身体表現の比較を行うため、運動能力テスト(MSTB)と創造性検査から得られた、個人得点の中央値によって、対象児を上位群と下位群に分け、表2-4に示す4群に分けた。

表2-2 運動能力からみたグループ編成

運動能力	上位群	下位群
対象児	14名(42)	13名(39)

()内は表現数

表2-3 創造的能力からみたグループ編成

創造的能力	上位群	下位群
対象児	14名(42)	13名(39)

()内は表現数

表2-4 運動能力・創造的能力からみたグループ編成

運動能力 創造的能力	上位群	下位群
上位群	A群8名(24)	C群6名(18)
下位群	B群6名(18)	D群7名(21)

()内は表現数

3) 分析の方法

上記の各グループを、身体表現の評価項目(全6項目)について評価し、上位群下位群における充実度(各項目についての合計数)について、統計解析ソフトNAP及びSPSSを用いて、その差について比較するとともにカイ二乗検定及び残差分析を用い、有意差検定を行った。

第三章 結果と考察

1.5歳児の身体表現の特徴と発達傾向

本研究の対象児27名が行った、81表現の特徴と発達傾向を6項目の評価項目から捉え、先行研究に対比した結果、次のようなことが明らかになった。

1) 身体表現の特徴と発達傾向

(1) 身体表現の発達

評価項目ア、イ、ウは、身体表現の発達を捉える項目である。

表現に用いられた動きの種類は1～5種類であり、項目ア、「多様な動きを用いることができる(3種類以上)」は54.3%であった(表3-1)。用いられた動きの内容は、走る、ジャンプ、ハイハイ歩き、くっつくなどである(表3-2)。

項目ウ、「部分と全身を使った動きができる(手足、顔のみでなく体幹部分も使った動きがある)」のは25.9%である。3～5歳にかけて、部分から全身へと表現が移行するが、本対象では表現対象の形態や特徴的な動きは、手や上肢で表現される傾向が強いが、全身を使った活発な動きが多くみられた。

みつけ出した動きを、どのように変化させて表現しているのかをみると、項目イ、「変化のある動きができる(方向の変化、繰り返し、複合した動きなどがある)」のは33.3%であった。対象とした表現では動きを繰り返したり、一つの動きを

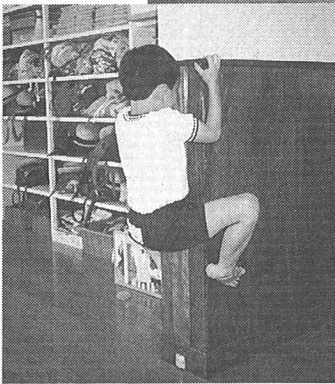
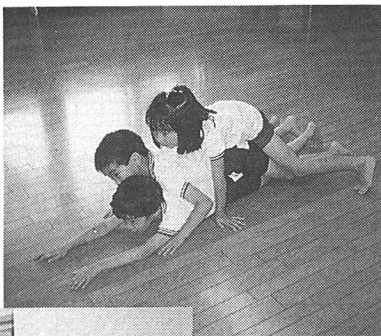
表3-1 身体表現評価項目別に見た表現数

	項目	表現数 (%)
第一の視点	発達を捉える項目	
ア	多様な動きを用いることができる(3種類以上)	44(54.3)
イ	変化のある動きができる	27(33.3)
ウ	部分と全身を使った動きができる	21(25.9)
第二の視点	思考特性を捉える項目	
エ	いろいろなことを表現する	40(49.4)
オ	細部にまでよく思考され、具体的に表現されている	14(17.3)
カ	他の子どもが思いつかない表現をする	10(12.3)
	対象表現数	81

()内は対象表現数に対する割合

表3-2 表現された動きの種類とその出現数

	種類数 (種類)	内容 (頻度)	出現数 (頻度)
移動の動き	7	走る(28)ハイハイ歩き(21)はねながら移動、歩く(11)這う(5)ギャロップ(2)よつこ(5)	8
全身を用いたその場での動き	9	くっつく(19)寝る(12)小さくなる(9)座る、隠れる(8)しゃがむ(7)乗る(4)ゆりかご、直立(1)	69
身体の部分を生かした動き	14	腕を上下する(8)叩く(8)伸びる(8)手を振る(4)つつく(2)ける(2)頭を振る(2)手足をバタバタ(2)手裏剣を飛ばす(2)足を回す(1)爪先立ち(1)お化けの手(1)忍者の手(1)腕を回す(1)	43
回 転	2	側転もどき(4)転がる(1)	5
跳 躍	2	ジャンプ(24)飛び降りる(7)	31



変化させたり、2つ以上の動きを複合させるなどの、変化のある動きが行われていた。

このように本対象の表現は、身体表現の発達を捉えるどの項目においても該当する表現がみられた。しかし、項目アが過半数であったのに対して、項目イ・ウはその比率が低くなった。したがって、項目イ・ウは5歳児にとって、やや難度の高い表現方法であると考えられる。

(2) 身体表現の思考特性

評価項目エ、オ、カは、身体表現の思考特性を捉える項目である。

項目エ、「いろいろなことを表現する(同じことばかり表現しない)」は49.4%みられた(表3-1)。対象児は2分間の中で、違う対象に変身したり、周囲の物や人を何かに見立てて表現に

利用するなど、広がりを持った表現を行っていた。

また、項目オ、「細部にまでよく思考され、具体的に表現されている(表現対象を詳しく表そうと工夫している)」のは、17.3%であった(表3-1)。口の動きや角の動かし方、動く速さの変化を工夫していた。若松²³⁾24)25)の示す「題材の捉え方が大まかな捉え方から、いろいろな角度から捉える、そして細かな変化(形態から質へ)と発達していく。」ことを考慮すると、項目オはエよりも5歳児には難しい表現の工夫であり、項目オの発現数が少ないことが理解される。

項目カ、「他の子どもが思いつかない表現をする」は、12.3%であった。対象とした表現では、他の子が思いつかない対象に変身したり事件を起こしたりしていた。この項目はオ同様、出現頻度が少なかった(表3-1)。

以上のように、身体表現の思考特性を捉える項目においても、各項目に該当する表現がみられた。しかし、項目エが約半数であったのに対し、項目オとカの比率は低く、他の項目に比べ、特に難度の高い表現であることが伺われた。

2) まとめ

対象児の行った身体表現の特徴は、約半数が3種類以上の動きを用い、違う対象に変身したり、周囲のものや人と関わりを持ちながら多様な身体表現を行うものであった。

5歳児になると獲得されると言われる、項目ア～カの評価項目をみると、全ての項目に該当する表現がみられた。このことは、「5歳児になると、表現対象の性質を捉えて動きを創り出す力が備わり、単純な動きの表現の段階から、全身を使い複雑化した身体表現ができるようになる。さらに動きの多様化や複合などができるようになる。」という、先行研究における身体表現と同様の傾向にあることを示している。

ところが、本対象に達成された各項目の比率は一様ではなく、項目ア、エは約半数であったのに対し、項目イ、ウは約3割であり、項目オ、カは、2割に満たなかった。

このことから、多様な動きを用いることができる、いろいろなことを表現することは獲得されやすいが、細部にまでよく思考され、具体的に表現されている、他の子どもが思いつかない表現をすることは、他の項目に比べ難度の高い表現方法であり、獲得されにくいことがうかがわれた。

2. 身体表現の充実と運動能力・創造的能力との関係について

1) 運動能力別グループによる身体表現の比較

運動能力の上位群と下位群の身体表現を比較した結果は、表3-3に示すとおりである。運動能力の上位群は下位群に比べ、オとカの項目について有意な値を示している($t \cdot x^2 = 7.77, df = 1, p <$

表3-3 運動能力別にみた身体表現評価項目の合計数

評価項目	群	運動能力 上位群	運動能力 下位群	χ^2
ア. 多様な動きを用いることができる (3種類以上)		26 (61.9)	18 (46.2)	2.02
イ. 変化のある動きができる		14 (33.3)	7 (17.9)	2.50
ウ. 部分と全身を使った動き ができる		13 (31)	8 (20.5)	1.15
発達を捉える項目、アイウの 合計数		53* (42.1)	33 (28.2)	5.10*
エ. いろいろなことを表現す る		22 (52.4)	18 (46.2)	0.31
オ. 細部にまでよく思考され、 具体的に表現されている		12* (28.6)	2 (5.1)	7.77*
カ. 他の子どもが思いつかな い表現をする		8* (19)	2 (5.1)	3.87*
思考特性を捉える項目、エオ カの合計数		42* (33.3)	2 (5.1)	5.87*
対象表現数		42	39	39

() 内は各群における% * $p < 0.05$

3項目合計における検定は、各群における対象数の3倍した数から導き出している。

表3-4 創造的能力別にみた身体表現評価項目の合計数

評価項目	群	運動能力 上位群	運動能力 下位群	χ^2
ア. 多様な動きを用いること ができる (3種類以上)		21 (57.1)	20 (51.3)	0.01
イ. 変化のある動きができる		15* (35.7)	6 (15.4)	4.35*
ウ. 部分と全身を使った動き ができる		13 (31.0)	8 (20.5)	1.15
発達を捉える項目、アイウの 合計数		52* (41.3)	34 (29.1)	3.96*
エ. いろいろなことを表現す る		22 (52.4)	18 (46.2)	0.31
オ. 細部にまでよく思考され、 具体的に表現されている		8 (19.0)	6 (15.4)	0.19
カ. 他の子どもが思いつかな い表現をする		4 (9.5)	6 (15.4)	0.21
思考特性を捉える項目、エオ カの合計数		34 (27.0)	30 (25.6)	0.06
対象表現数		42	39	39

() 内は各群における% * $p < 0.05$

3項目合計における検定は、各群における対象数の3倍した数から導き出している。

0.02; $\chi^2=3.87, df=1, p<0.05$)。また、アイウの合計数(身体表現の発達を捉える項目)及び、エオカの合計数(身体表現の思考特性を捉える項目)さらに、6項目の合計数においても有意な値を示した(アイウ: $\chi^2=5.10, df=1, P<0.02$; エオカ: $\chi^2=5.87, df=1, P<0.02$; ア~カ: $\chi^2=10.80, df=1, P<0.01$)。

したがって運動能力の上位群は下位群に比べ、身体表現の発達を捉える項目においても、身体表現の思考特性を捉える項目においても、表現が充実しており、特に5歳児では難度の高い表現の工夫である「細部にまでよく思考した具体的な表現」や「他の子どもが思いつかない表現」をすることができることがわかった。

このように、運動能力は身体表現の充実に深く関係していることが捉えられた。

2) 創造的能力別グループによる身体表現の比較
創造的な能力から対象を上位群と下位群に分け身体表現の充実度を比較したものが表3-4である。上位群は下位群に比べ、項目イ「変化のある動きができる」について有意な値を示した($\chi^2=4.35, df=1, P<0.04$)。また、アイウの合計数(身体表現の発達を捉える項目)においても有意に高い値を示した($\chi^2=3.96, df=1, P<0.05$)。

したがって、創造的能力上位群は下位群に比べ、「身体表現の発達を捉える項目」において表現が充実しており、特に項目イ「変化のある動きができる」が示す、動きに変化を加えたり、繰り返したり、動きを複合する表現が、充実していることがわかった。

このように、創造的能力は一部の身体表現の充実に深く関係していると考えられる。

3) 運動能力・創造的能力別グループによる身体表現の比較

運動能力と創造的能力によって対象をA~Dの4群に編成し、身体表現の充実度を比較することにする(表2-4)。

A~Dの4群を比較した結果が表3-5である。ア~カの6項目の合計とアイウの合計数(身体表現の発達を捉える項目)について、A群は他の群に比べ有意に高い値を示した(ア~カ: $\chi^2=13.35, df=3, P<0.01$; アイウ: $\chi^2=8.72, df=3, P<0.03$)。運動能力も創造的能力も上位にあるA群が、他の群に比べ有意に高い値を示したことは、身体表現には、運動能力と創造的能力が関係しており、両能力が十分に獲得されている場合に、もっとも充実した身体表現が可能になることを示している(表3-5)。

さらに詳細にみるために、運動能力は共に上位にあるが、創造的能力が上位と下位にあるA・B群を比較した(表3-6)。その結果、A群はB群に比べ項目イについて有意に高い値を示した。また、アイウの項目(身体表現の発達を捉える項目)についても10%水準ではあるが、有意に高い値を示した(アイ: $\chi^2=3.94, df=1, P<0.05$; アイウ: $\chi^2=2.96, df=1, P<0.09$)。

一方C・D群は共に運動能力の下位群であるが、創造的能力が上位と下位にある群である。C群とD群を比較した結果、両者には明らかな差を見いだすことはできなかった。(表3-6)

4) まとめ

運動能力が上位にある場合と、下位にある場合とでは、創造的能力の影響が異なると言える。つまり、運動能力が上位にある場合は、創造的能力は「身体表現の発達を捉える項目」を充実させ、特に「変化のある動きができる」ことに影響を与えていた。しかし、運動能力が下位にある場合は、

表3-5 4群で見た身体表現評価項目ごとの合計数

群	A	B	C	D	x^2
ア. 多様な動きを用いることができる (3種類以上)	15 (62.5)	11 (61.1)	9 (50.0)	9 (42.9)	2.23
イ. 変化のある動きができる	11 (45.8)	3 (16.7)	4 (22.2)	3 (14.3)	7.37
ウ. 部分と全身を使った動きができる	9 (37.5)	4 (22.2)	4 (22.2)	4 (19.0)	2.45
発達を捉える項目、アイウの合計数	35++ (48.6)	18 (33.3)	17 (31.5)	16-- (25.4)	8.72 +
エ. いろいろなことを表現する	13 (54.1)	9 (50.0)	9 (50.0)	9 (42.9)	0.58
オ. 細部にまでよく思考され、具体的に表現されている	7 (29.2)	5 (27.8)	1 (5.0)	1 (4.8)	7.79
カ. 他の子どもが思いつかない表現をする	4 (16.7)	4 (22.2)	0 (0)	2 (9.5)	4.73
思考特性を捉える項目、エオカの合計数	24 (33.3)	18 (33.3)	10 (18.5)	12 (19.0)	6.61
6項目の合計数	59++ (41.0)	36 (33.3)	27 (25.0)	28-- (22.2)	13.35 ++
対象表現数	24	18	18	21	

() 内は各群の全対象表現数に対する%
 x^2 値の有意水準は * $p < .05$, ** $p < .01$, x^2 検定の結果、有意なものについては残差分析を実施した。+ (-) は有意な割合が高い (低い) ことを表す。
 + (-) $p < .05$, ++ (-) $p < .01$

表3-6 A・B群、C・D群にみた身体表現評価項目ごとの合計数

群	A	B	x^2	C	D	x^2
ア. 多様な動きを用いることができる (3種類以上)	15 (62.5)	11 (61.1)	0.01	9 (50.0)	9 (42.9)	0.20
イ. 変化のある動きができる	11* (45.8)	3 (16.7)	3.94 *	4 (22.2)	3 (14.3)	0.42
ウ. 部分と全身を使った動きができる	9 (37.5)	4 (22.2)	1.12	4 (22.2)	4 (19.0)	0.00
発達を捉える項目、アイウの合計数	35 (48.6)	18 (33.3)	2.96	17 (31.5)	16 (25.4)	0.53
エ. いろいろなことを表現する	13 (54.1)	9 (50.0)	0.07	9 (50.0)	9 (42.9)	0.20
オ. 細部にまでよく思考され、具体的に表現されている	7 (29.2)	5 (27.8)	0.01	1 (5.0)	1 (4.8)	0.00
カ. 他の子どもが思いつかない表現をする	4 (16.7)	4 (22.2)	0.003	0 (0)	2 (9.5)	0.38
思考特性の捉える項目、エオカの合計数	24 (33.3)	18 (33.3)	0.00	10 (18.5)	12 (19.0)	0.01
対象表現数	24	18		18	21	

() 内は各群の全対象表現数に対する%
 x^2 値の有意水準は $p < .1$, * $p < .05$
 3項目合計における検定は、各群における対象数の3倍した数から導き出している。

創造的な能力が上位にあっても表現の充実に、影響が現れないことが捉えられた。

これらの結果から、運動能力と創造的能力とが十分に獲得されている場合に、最も充実した身体表現が可能になる。そして、運動能力が上位の場合は創造的能力が身体表現の充実に生かされるが、運動能力が下位の場合は、創造的能力が上位に

あっても身体表現への影響が現れにくいことが示唆された。

第四章 結論

5歳児の身体表現の特徴及び運動能力・創造的能力との関係について検討するために、幼児の身体表現を共通の尺度から捉える独自の評価項目(全6項目)を作成し、対象児の身体表現を捉えたところ次の結論が導かれた。

1. 身体表現の特徴と発達傾向

対象児の約半数が獲得していた身体表現の特徴は、3種類以上の動きを用い、次々と違う対象に変身したり、周囲の物や人と関わりをもちながら多様な身体表現を行うものであった。これらは、先行研究の発達傾向に合致していた。このことから、5歳児にとって多様な動きを用いたり、いろいろなことを表現することは獲得されやすいが、細部にまでよく思考したり、具体的に表現することや、他の子どもが思いつかない表現をすることは、難度の高い表現方法であることが示唆された。

2. 身体表現と運動能力・創造的能力との関係

1) 運動能力・創造的能力から身体表現との関係をみた場合、次のようなことが明らかにされた。

運動能力と創造的能力の両能力が共に高いときに、最も充実した身体表現が可能になる。しかし、運動能力は創造的能力よりも、身体表現に与える影響が強く、運動能力が上位にある場合は創造的能力が身体表現の充実に生かされるが、運動能力が下位の場合は、創造的能力が上位にあっても影響を与えにくい。

2) 運動能力あるいは創造的能力を独立させて身体表現との関係をみた場合は、次のようなことが明らかにされた。

運動能力が上位にある場合は、下位にある場合に比べ、身体表現の充実を捉える2つの項目である「身体表現の発達を捉える項目」と「身体表現の思考特性を捉える項目」の両項目において身体表現が充実し、特に「細部にまでよく思考され具体的に表現されている」や「他の子どもが思いつかない表現をする」の表現が充実していた。

一方、創造的能力が上位の場合は、下位にある場合に比べ、「身体表現の発達を捉える項目」に関わる身体表現が充実しており、特に「変化ある動きができる」の表現が充実していた。

【参考文献】

- 1) 池田裕恵・三原みどり「幼児期にふさわしい身体表現活動の題材」湘北紀要8 1987 pp. 39-46.
- 2) 池田裕恵・三原みどり「幼児期にふさわしい身体表現活動の題材(2)」湘北紀要11 1990 pp. 69-76.

- 3) 小林芳文・是枝喜代治 子どものためのムーブメント教育プログラム 大修館書店 1993 全235頁
- 4) 松本千代栄・名須川知子 ダンスの教育学1—発達段階とダンス表現— 徳間書店 1992 全302頁
- 5) 松本千代栄 幼児教育学全集6 小学館 1971 pp. 250-318.
- 6) 文部省 幼稚園教育要領 文部省 1989 全12頁
- 7) 西洋子・川村真寿美 「幼児の身体表現活動の発達—図形のイメージと表現—」 舞踊学第11号別冊 1988 pp. 26-28.
- 8) 恩田彰 S-A創造性検査手引きP版 創造性心理研究会 1976 全47頁
- 9) R. E. Orpet原著 小林芳文訳 MSTB小林・フロスティック・ムーブメント スキル テスト バッテリー 日本文化科学社 1989 全82頁
- 10) 坂元彦太郎 幼児教育学全集6 小学館 1971 pp. 10-60.
- 11) 柴真理子 「表現的な動きの発達に関する研究」神戸大学教育学部研究集録第68集 1982 pp. 81-95.
- 12) 内田伸子 「幼児はいかに物語を創るか？」 教育心理学研究30 1982 pp. 212-222.
- 13) 内田伸子 想像力の発達—創造的想像のメカニズム サイエンス社 1990 全255頁
- 14) ヴィゴツキー, L,S (福井研介訳) 子どもの想像力と創造 新読書社 1974 pp. 18-40.
- 15) 若松美恵子 「4才児の身体表現能力の発達」 白梅学園短期大学紀要第25号 1989 pp. 45-56.
- 16) 若松美恵子 「5才児の身体表現能力の発達」 白梅学園短期大学紀要第26号 1990 pp. 69-80.
- 17) 若松美恵子 「3才児の身体表現能力の発達」 白梅学園短期大学紀要第29号 1993 pp. 49-61.
- 18) 山下俊郎 「改訂幼児心理学」全265頁 1955 朝倉書店

その他

注1) 感覚—運動能力は、子どもの全面的な発達の基礎(感覚—運動能力, 言語, 知覚, 高次認知機能, 社会適応, 情緒発達)を形成するとして、重要であることが知られている。MSTBは、この感覚—運動能力を測るために開発されたものであり、5つの運動属性(目と手の協応, 平衡性, 筋力, 柔軟性, 視覚によって導かれるムーブメント)から評価される。

注2) S-A創造性検査P版は、テスト1~6で構

成され、各テストごとに思考の特性として速さ、広さ、独自さ、深さが評価される。